

# 学校教育の逆説

——安岡章太郎「宿題」——

安藤陽平

安岡章太郎は『戦後文学放浪記』（岩波書店、二〇〇〇・六）のなかで、自身の最も苦手なものに「学校と軍隊と病院」を挙げている。このなかで学校と軍隊は、初期作品の舞台としてしばしば採用されていた。いずれも安岡文学における象徴的空間とっていいが、先行研究では軍隊への注目が多く、学校への分析はそれほど進んでいない。<sup>①</sup>

付言すれば、「悪い仲間」（『群像』一九五三・六）のような作品や、「青葉しげれる」（『中央公論』一九五八・一〇）・「相も変わらぬ」（『新潮』一九五九・六）などいわゆる「順太郎もの」に描かれた受験浪人への考察は蓄積がある。<sup>②</sup>しかしそれらの作品の主たる内容は悪友たちとのホモソーシャルな交流であり、学校そのものは焦点化されない。本稿でも述べるように、受験は近代日本の学校教育と深く関わるが、しかし右に挙げた作品では、安岡文学における主題としての「母」との関係性、そして戦争という時代状況との関連が強調されているように読める。

そこで本稿では、「宿題」（『文学界』一九五二・二）を対象として、安岡文学が描いた学校を読み解いてゆく。安岡の三作目であり、商業誌デビュー作となった本作は、作者が経験した尋常小学校時代の教育を素材に描かれている。これまで本格的に論じられてこなかったが、宿題を主たるモチーフとした広い射程の学校教育批評を読み取ることができるとする。

本稿の問題意識に近い先行研究に、山崎省一『安岡章太郎論』（沖積舎、二〇〇四・一一）がある。山崎は、「学校は、国家と社会全体が、政治的・

経済的・イデオロギー的支配をスムーズに機能させるための、不可欠の機構」であるとし、「宿題」には「学校のもつイデオロギー的支配の自己内面化」が描かれているとする。大枠では首肯できるが、しかしこれは学校を描いた作品の多くにいい得る抽象的な指摘にとどまっている。

というのも、本作は一九三一年の東京・青山南小学校という具体的な舞台をもっている。学校嫌いで知られる作者の手になる本作が、学校教育への批判的スタンスを示していることは想像に難くない。本稿の関心もそこに注がれることになるが、それはあくまでも具体的な時空間の設定を通じて描かれていることに注意しなくてはならない。これを抜きにしては通俗的な学校批判と大差ない考察となってしまう、安岡文学が描く学校を読み解こうとする問題設定の意義は減じられるだろう。

加えて、戦前の尋常小学校を描いた作品を戦後に発表した点も一考されるべきである。アジア・太平洋戦争後の対日占領を経験するなかで、日本の教育制度も変更を迫られた。そうした状況下で戦前の学校を描く意味についても考えてみたい。

## 一、学校教育と帝国主義

「宿題」は「僕」の視点から語られる。語られる出来事は現在時に生起しているように読めるが、作中人物の沢村先生が陰で「僕」の母に入れ

知恵したことなど、事後的にしか知り得ない情報を「僕」が語っていることから、実は回想であるとわかる。語りの現在がいつかは不明瞭だが、徹夜を「テツヤ」とカタカナ表記して子どもにとつての未知を演出するなど、「僕」は小学五年生時の自分と等身大であるうとしている。

「僕」はまず、弘前から東京青山の南小学校への転校という出来事から語り起こす。南小は府立中学への進学実績で有名とされ、「帝大へ行くためには府立の中学へ入らなければならず、そのためには南学校でなければダメだと信じていた」母が、強く「僕」の入学を希望したとある。

こうした母の姿は安岡作品でよくみかけるが、本作ではそれに先行して転校という情報が配置されていることに注意しよう。これは作者の経験と重なる部分がある。高知県で生まれた安岡は、陸軍獣医だった父の転勤で各地を転々とし、小学校だけで六回の転校を経験した。簡略に示せば、南山小学校（京城）↓第二大成小学校（弘前）↓第四荏原小学校（東京）↓第二大成小学校（弘前）↓青山小学校（東京）↓青南小学校となる。母の強い要望により入学したというこの青南小が、「宿題」における南小学校のモデルである。青南入学時、安岡は「僕」と同じく小学五年生になろうとしていた。<sup>③</sup>「宿題」で明示的に語られるのは弘前から東京への転校のみであるが、「僕」の話す言葉に「四国弁と東北弁と植民地言葉のごっちゃになったナマリ」があることから、作者に近い来歴を想定してみることができよう。

「僕」は転校して早々東京の子どもから疎外されている。転校（＝移動）の経験による払拭しがたい痕跡のためである。ある女子生徒によって与えられた「田舎のモダンボーイ」というネーミングはその内実を言い当てている。「田舎」と「モダン」の組み合わせは、田舎／都市、近代／近代、未開／文明などと換言可能な二項対立であろう。しかし、その対立する二項が緋い交ぜになった存在が「僕」なのだ。「僕」の疎外は「田

舎」性ゆえではなく、「田舎」的である一方で「モダン」でもあるという混淆的な様態のために引き起こされているのである。

弘前時代の「僕」の姿をみてみよう。「僕」は当時を振り返り、「読本を標準語の発音で読めるのは教師もふくめて僕だけで、優等生にされるのにはそれで充分だった」と語る。だが、優等生扱いも一種の差異化であり、疎外の一形態であろう。移動の痕跡としての発話を原因に有徴化され疎外される点で、両地における「僕」への扱いはコインの裏表に過ぎない。「僕」は「田舎」の側に属しているわけでもないのである。「僕」は「田舎」と「モダン」のアマルガムなのだ。

ところで、「僕」はなぜ転校することになったのだろうか。作者安岡の場合、それは軍人である父の転勤、つまり帝国日本の膨張政策を背景とした移動であった。他方、「僕」の父は軍人とは書かれていないが、「官吏」で「出張ばかりさせられている」。それが理由で植民地にまで転校したのだとすれば、「僕」の転校にも帝国の欲望が介在した可能性を見込むことができる。

そう考えてきたとき、本作には日本の帝国主義に関連する要素が鋳められていることに思い当たる。従姉のサダカさんの叔父が「株で失敗」して自殺したという設定は、定期的に昭和恐慌を想起させる。それは日本がアジアへと膨張してゆく一因であったが、その延長線上にある満州事変も「僕」の母と隣人の会話で触れられている。後述のように、本作では満州事変を契機に軍国主義教育が強まる様子も描かれるのである。

満州事変と関連して、作中で「僕」が買った「新高の風船ガム」に注目しよう。製造元の新高製菓は、一九〇五年に森平太郎が創業した台湾の製菓会社である。『森平太郎物語』（「森平太郎物語」製作委員会、二〇一・一〇）は、森の渡台を語る際にまず日清・日露戦争の勝利を挙げる。日本が「領土を海外へ広げようとするなか、森平太郎さんもふる

さとをとび出し、新しく商売を始めようという夢を抱きます」。その「夢」は、台湾の豊富な資源に着目し、統治に際して製糖業を一大産業に仕立て上げようとする大日本帝国の欲望と合致するものであった。

「新高の風船ガム」は、同社が一九三二年三月に発売した「新高風船チウインガム」だろう。日本における風船ガムの嚆矢として一大ブームを巻き起こしたとされるが、<sup>④</sup>当時このガムと満州事変を結びつける語りが存在した。『読売新聞』一九三二年二月一〇日の夕刊広告には、「新高風船チウインガムを満州へ！」とのフレーズが躍り、「水は凍り渴を癒す術もなき酷寒在満の勇士へ疲労回復の糖分と飲水を贈るに等しき国産新高チウインガムをお忘れなく慰問袋の中にお収め下さい」と記されている。また、『台湾日日新報』一九三一年二月一九日の記事「東洋の大新高を目標に 新高製菓の大躍進」は、新発売の風船ガムについて取り上げ、戦場での渴きを癒すのは「ガムのみが持つ天与の特質であり、天恵的使命」とし、「新高チウインガムの持つ使命と用途は今正に時と所とを併せ得てガム本来の使命と本邦産業界の先駆者としての任務を遂行す」と結語しているのである。

このように、「新高の風船ガム」もまた日本の帝国主義を想起させる形象として読むことができる。そして本作の「僕」はそれを嫌い、それに苦しみられるのである。「新高の風船ガム」は「特別大きくて」、「僕」の「舌」を「動かなく」する。これを発話の禁止と解せば、「僕」は帝国の欲望による移動で不利益を被っても、声をあげることが封じられているという暗示に読める。他方、そのガムを無意識に買ってしまおうという展開からは、帝国から身を引き剥がして批判することの困難も同時に示されているといえる。「僕」もまた植民地的収奪の恩恵に与る宗主国の人間であり、台湾に出自を持つ製菓会社の商品を享受する身分であるからだ。ここでも「僕」は混淆的なのである。

帝国主義と関連するもうひとつの要素が「標準語」である。それは近代国民国家建設のために要請された「国語」であり、日本がアジアへと膨張してゆくなかで現地人に強制した言語であり、そして新高のガムに同じく発話（「舌」）をめぐる「僕」を苦しめるものである。「標準語」の創造と普及に関わった上田万年は、一八九五年の講演「標準語に就きて」<sup>⑤</sup>で、「標準語」を「所謂方言なる者とは事かはり、全国内到处、凡ての場所に通じて大抵の人々に理解せらるべき効力を有するもの」と定義した。そして「標準語」は元々方言に過ぎないことわつたうえで、「帝国の首都の言語」である「東京語」をその位置にまで高めることを提案した。ここで「東京語」とは「教育ある東京人の話すことば」であり、いわゆる「ペランメー」言葉」とは区別されている。

「標準語」普及の一翼を担ったのは、「宿題」が舞台とするところの学校であった。一九〇〇年の小学校令改正（『官報』第五一四〇号、一九〇〇・八・二〇）で「国語科」が新設、続く一九〇三年には教科書国定制（『官報』第五九三〇号、一九〇三・四・一三）が敷かれた。第一期の編纂趣意書（文部省『国定教科書編纂趣意書』一九〇四・五）には、「文章ハ口語ヲ多クシ用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルモノヲ取リカクテ国語ノ標準ヲ知ラシメ其統一ヲ図ルヲ務ムル」と銘記されている<sup>⑥</sup>。飛田良文『東京語成立史の研究』（東京堂出版、一九九二・九）が述べるように、国定教科書の登場こそは「国が定めた、唯一の規範性をもつ日本語」の創出を意味していた。本作で「僕」の発話が読本音読によって問題化されていたことは、学校教育における「標準語」の教え込みを活写したものであるといえよう。

弘前からの転校生という設定も看過できない。第一期『尋常小学読本一』（一九〇三・八）は、最初の頁にもとづいて「イエスシ読本」と俗称されるが、イ・ヨンスク『国語』という思想（岩波書店、二〇一一・二）

によれば、この文字配列は「東北地方における「イ」と「エ」、「シ」と「ス」の混同」の矯正を狙ったものであった。本作では、弘前の教員の発話が「ヤシオカにまけるな」(傍点稿者)と記され、表記レベルで「ス」・「シ」の東北的な混同が示されている。弘前から東京という道程も、「標準語」の存在をクリアに浮かび上がらせる仕掛けとして読めるのだ。

さらに、「僕」の言葉には「四国弁」と「植民地言葉」も混入しているのであった。植民地には先の新高製菓がある台湾も想起されるが、どこを指しているか作品では明示されない。しかし、いずれにせよこれらすべて東京を(中心)とした場合の(周縁)に位置づけられる地域である。「標準語」の観点からは、東北・四国・植民地は教化対象として定位されるのであり、その点では等価なのだ。

「僕」の転校に帝国主義が介在したかどうか、それを断定することはできない。しかし東京での「僕」の苦しみにおしなべて帝国主義が絡んでいることは以上から明らかだろう。「僕」の疎外状況の根本にあるのは日本の帝国主義なのである。

帝国主義と学校教育の関係についてもう一点みておきたい。まず、「僕」と大工の子どものケンカに目を向けよう。それは後者の「かき食ってんのけえ」という発話を発端としている。先述のように、「標準語」は「東京語」とされたが、それはいわゆる山の手言葉に限定されていた。しかし、この大工の子どもの言葉は明らかに下町のそれである。「僕」には「カキケケコ、カキケケコ」としか聞こえなかったのも、それが「標準」的でない発話だったからであろう。南小の生徒でも、同級生の大熊は「ナニワ節のような声で話す」とされ、「おめえ、宿題をやったか」と下町ことばを使っている<sup>⑧</sup>。東京の子どもたちも決して均質な集団ではなく、多様性を内包していることが端々に描き留められているのである。そのはずで、「僕」が通っている南小は、その進学実績を目当てに「区域外から

電車やバスで通ってくる子もたくさんいた」のであった。

また、南小は府立中学への進学率で有名とされるが、実は生徒全員が中学進学組なのではない。「僕」と同じクラスの大熊や鈴木は高等科に進むことになっており、そうであるがゆえに宿題をやってこなくても叱られないが、そのかわり成績も全甲をもらうことはできない。高等科か中学進学かという選択には、広い意味での階級が関わっているはずで、それを基準とした分断も描かれているのである。

右のふたつとはやや異なるが、東京市自治記念日も分断の表徴である。この日は南小など「市内」の学校は休日だが、「世田谷など市外の学校」は平常通りの授業日とされる。東京をめぐる分割線が前景化されつつ、さらに「僕」は「市外」で「百姓がイモを掘って」る光景に出会っている。東京市を一步出れば、そこには「市内」の人々が蔑む「田舎」の風景が広がってしまっているのだ。

こうした多様性は、「僕」に対する疎外を通じて不可視化される。「僕」は、登校せずに墓地へ行っていたことがクラス中に露見すると、「組中七十何人の子の嘲笑」を浴び、追い回される。追いかける生徒たちに付された「なまけもの退治の軍隊」という表現は、決して一枚岩ではないはずの生徒たちが、「僕」を標的に定めることで均質な一つの集団として立ち現れている様相を伝えている。「僕」は「鈴木の本つまで」と、鈴木がその「軍隊」にいたことを特筆するが、先述のように鈴木は高等科に進む生徒であって、南小ではむしろ有徴の存在であるはずだった。

ここに描かれた「僕」とクラスの生徒たち、ひいては東京の子どもたちの関係性は、帝国と植民地のそれを集約的に表現したものといえよう。そのうえで注目したいのは、追い立てられながら「僕」が、「僕は、人喰い土人の中にいる」と感じていることである。「人喰い土人」は、野蠻のアイコンであり、ここまでの言葉でいえば未開や前近代、そして「田舎」

と親和的な表現であろう。「田舎のモダンボーイ」として疎外される「僕」の眼を通せば、都市・近代・文明の側にいとされる東京の子どもたちこそ野蠻に映っているのである。

学校とは、多様であるはずの子どもたちを均質な集団へと還元する装置である。「標準語」はそのよい例であった。そしてまた学校とは、そこでの教育によって、自らの身振りが野蠻であることを覆い隠すイデオロギー注入の装置である。本作で、「校長先生が朝礼でこんどの戦争についてお話しをした」り、軍人の父兄から寄付された「前にシナからもって帰った戦利品」を「よく見ておきなさい」と教員に指示されたりしているが、ここには満州事変前後という状況の描写以上の意味を読み込める。これこそが、些細ではあるが確かな言語行為を通じて、帝国の野蠻を覆い隠す教育的営為なのである。

## 二、〈知〉の偏在

本節では、標題にも採用されている宿題に注目し、本作で描かれる学校とそこでの教育についての分析を深めてゆく。

夏休みの銭湯で、同級生の大熊が「おめえ、宿題をやったか。休みは、きょうを入れてあと八日だ」と「僕」にたずねる。そして「僕」は、「この大熊のひと言で突然東京の子の仲間に入れられた」と語るのである。前節では「僕」が疎外される様相を考察したが、ここでは一転して、宿題を介して東京の子どもたちに包摂されたかのようなのである。換言すれば、「僕」は宿題をすることと東京の子どもであることを結びつけて語っている。

佐藤秀夫「宿題」はなぜ生まれたのだろう（『おそい・はやい・ひくい・たかい』一九九九・二）によれば、宿題の起源は、一九〇七年の小学

校令改正<sup>10</sup>にある。同改正により従来四科目だった必須科目が九一〇科目に増え、週の平均教授時数も二六二七時と一〇二時間増加した。結果、授業時間に全内容を教え切ることが困難となり、「とくに繰り返し練習で習得されるとみなされた漢字学習や演算などについては、学校での授業にもまして家庭での練習が求められた」、「これが宿題のはじまりである」と佐藤は述べる。

他方、夏休みの宿題は事情が異なる。長期休暇は一八八一年の「小学校教則綱領」第七条（『文部省達』第二号、一八八一・五・四）で定められた。佐藤秀夫『学校教育うらおもて事典』（小学館、二〇〇〇・二）によれば、これも例によって欧米からの移入だが、日本は四月学年始期制であるため、新学期が開始して三〜四ヶ月で夏休みに入る。「軌道に乗った授業の流れが中断されないように」と学校側が考えた結果、休暇中に宿題を課すことになった。佐藤は、欧米の学校は日本より長い休暇をとっているが「宿題は皆無」だとし、そもそも「休みの日に宿題（課業）を求めることは矛盾にほかならない」と指摘している。

こうしてみると、宿題は、性急な近代化を推し進めた結果生じた日本の学校教育における矛盾点であることがわかる。もともと、一九三一年前後の進学校を描いた本作では、佐藤の指摘とはまた異なる宿題の問題性が描かれている。

みるべきは、「弘前じゃ宿題なんて、誰も知りやしない。先生だって、宿題なんて云ったことはない」という「僕」の語りである。これが事実ならば、弘前では宿題を課す必要がなかったことになる。つまり弘前と東京では教授内容に差異がある。そしてそれは実際に「僕」が直面した現実であった。南小への転校当初、「算術や理科となると僕にはまるで見当がつかない」かった。「五年の一学期がやっとおわりうとしていた所なのに、南学校ではもう六年級の学科にとりかかっている」からである。

こうした事態を引き起こしているのが、中学受験の存在である。夏休み明け、「僕」に宿題の存在を知らせたはずの大熊を含め、宿題をやったこなかった生徒が描かれる。彼らは高等科に進む生徒であり、「勉強のことでは、どんなにナマけても怒られ」ずに済むのだという。宿題をサボると怒られるのは中学受験組だけなのである。そうであるならば、本作における宿題は、受験教育の象徴として描かれていると読める。宿題をやることは受験競争への参加であり、それが「東京の子の仲間」に入るということなのだ。

ただし「僕」の場合、自発的に受験競争に参加したのではない。それは、息子に府立中↓一高↓帝大という戦前エリートコースを歩ませることを夢見る母の所業である。そしてそれは、この母に特異なことでもない。中学受験人口の増大は大正期に生じたが、その一因は「僕」の家庭のような新中間層が増えたこと<sup>①</sup>にあった。加えて同時期には、特に新中間層における母親の教育熱が煽られていたのであった<sup>②</sup>。

息子にエリートコースを歩ませる動機には、学歴信仰があるだろう。実際、当時は帝大に進めば高確率で国家官僚への道が拓かれていた。しかし学歴信仰は、学校教育への盲目的な態度を生みかねない。学校それ自体や、そこでおこなわれる教育に対する批判的見地は消失しがちである。すると、息子が不出来であった場合、学校に非があるのではなく、息子に非があるのだという論理になる。成績をはじめとする〈学校的価値〉でもって息子を裁くようになるのだ。

宿題の存在は、それに拍車をかける。宿Ⅱ家でおこなう課題の呈示は、家庭を学校の延長線上に位置づける行為である。八月三十一日、真白な宿題帖を目にした母が、「お前も死になさい。あたしも死ぬから」といい放つ場面は象徴的だ。宿題をしていないことをもって「死」を命ずる論理は、〈学校的価値〉に沿うものだけが生きるに値するという論理である。

宿題を契機としたこの母の一言によって、「僕」の家庭は学校化の度合を深めることになる。「晚ご飯のあとで電気をつけて机に向っているところを、お母さんが見ればきつと怪しむにちがいない」と推測したり、友達に仲間外れにされるところを母に見られないようにしたりする「僕」のふるまいは、母のまなざしに教員の影を察知している。

こうした状況ゆえに「僕」は墓地へと繰り出すようになるのだが、しかし「僕」が〈学校的価値〉から逃げ回っているのではなく、むしろそこに自らを沿わせようと努めていることは見逃すべきでない。その様子はやはり宿題を介して描かれている。「僕」は「感心な子になるには宿題が第一だ」、「宿題をやらぬのは悪い子だ。それは何より悪いことだ」と「自分に云いきかせ」ている。「自分に云いきかせ」る様子に、「宿題をやらぬのは悪い子だ」と心底納得できているわけではない。「僕」の姿が滲んでいる。しかし、だからといって「僕」は宿題という矛盾的な産物を批判するのではなく、あくまでそれをやろうとする。「僕」は「感心な子」になりたいのである。

母の眼を気にして家で宿題ができない「僕」は、墓地で宿題をするようになる。ここに、安岡らしいユーモアに包み込まれた学校教育批判を読み取ることができる。「僕」は同級生や母に見られたくない姿——宿題をやったくない「悪い子」であることの改善ではなく、それを隠す方向に進んでいるのである。

本作の随所で、ウソをつく「僕」の姿が描かれる。銭湯でお釣りをゴマかすのはその最初の例である。そして作品後半、山小学校の沢村先生と母の会話で、「嘘つき」は重大事として扱われている。下校中の「僕」が友達から追い立てられているのを目にした沢村先生は、「僕」の担任である金原先生に事情を聴きに行き、「僕のあらゆる悪事を全部知って、母にきかせた」のであった——「もしあの子が正直に白状してしまわない

ようなら、あの子は一生嘘つきでおわる」。母が「学校へは毎日行っている？」とたずねると、「僕」は「行ってるよ毎日」とウソをつく。

「嘘つき」が悪とみなされるのは、学校教育における「徳育」の成果でもあるだろう。教典である「教育勅語」(『官報』第二二〇三号、一八九〇・一〇・三一)では、学校教育によって「徳器ヲ成就」せよとの呼びかけがなされていた。<sup>⑧</sup>「徳器」は多義的だが、「正直」であることはまさしくそのひとつであった。作中時間で用いられていた第三期修身教科書をみれば、「ウソライフナ」(『尋常小学修身書 卷二』一九一八・二)、「シヤウヂキ」(『尋常小学修身書 卷二』一九一九・二)、「しやうぢき」(『尋常小学修身書 卷三』一九一九・二)といった徳目が並んでいる。もちろん、そこに「ナマケルナ」(『尋常小学修身書 卷二』前掲)、「ベンキヨウセヨ」(『尋常小学修身書 卷二』前掲)なども確認できる。これらの基準からは、「僕」は当時の学校教育における「劣等生」だということになる。

しかし注意せねばならないのは、宿題をしなかつたりウソをついたり、「僕」だけに帰責できないということだ。そもそも「僕」が宿題で困っているのは、弘前から転校してきたためその内実をよく知らないうえ、授業内容も受験に合わせて弘前より進んでいるからであった。「僕」は宿題をしてこないのではなく、できないのである。「僕」は、受験をめぐる東京と「田舎」の教育格差に引き裂かれているのだ。しかも悪いことに、南小に入学させた母はそうした「僕」の窮状を触知していない——「お母さんが東京の小学生を知らないのは僕以上だ」。

家庭も学校と化し、宿題をしようにもできない「僕」が叱られずに日常を生き延びていくために、墓地のような避難所に向かう以外のどんな選択肢があり得ただろうか。「僕」はいわば構造的に「嘘つき」にさせられているのだ。そしてその構造とは、学校教育が構築したものにほかならない。自らが掲げる徳目から生徒が逸脱してしまう状況を、ほかなら

ぬ学校それ自体が作り上げているという逆説がここに読み取れる。

### 三、空転する学校教育

前節でみたように、「僕」はあくまで「感心な子」になろうとし、墓地で宿題をする。その墓地には、軍神として語り継がれ、学校教育でも範とされてきた乃木希典の墓が存在するとされる。

尋常小学校の国語や修身の教科書には、乃木の逸話を語る文章が掲載された。そのうち、第三期国定教科書には「乃木大将の幼年時代」(『尋常小学国語読本 卷八』一九二一・四)、「水師営の会見」(『尋常小学国語読本 卷九』一九二二・二)、修身では「清廉」(『尋常小学修身書 卷六』一九二三・二)が掲載された。小学五年生である「僕」がその年に使用している教科書には「水師営の会見」が載っている。

「水師営の会見」は、旅順攻囲戦の停戦条約締結をめぐる乃木と敵将ステッセルの姿を描くものである。大濱徹也『乃木希典』(講談社、二〇一〇・一二)は、教科書に掲載されたなかでも「水師営の会見」は「常にかたりつがれ」たと述べ、「武人」の鑑として「栄光の明治」とともに教えられ、少年の心に強く刻印された」としている。

本作の作中時間である一九三二年は満州事変のあった年だった。南小では「校長先生が朝礼で今度の戦争について」話し、軍人の父兄が寄付した「前にシナからもって帰った戦利品」を、担任が「よく見ておきなさい」と促している。こうしたなか、これから「お国のために」戦地へ赴く可能性のある生徒たちに対して、「武人」としての乃木像が一層強調されるであろうことは想像に難くない。

にもかかわらず、学校をサボって乃木の墓がある——わざわざ「僕」はそれを語る——青山霊園へ行き、そこで宿題をするという展開に、軍

国主義教育に対する諷刺を読むことができるだろう。そのイロニーは、「僕」が「戦争反対」と書かれたピラを剥がして回る本作のラストにも通じるものである。先んじていえば、本作は「僕」という存在の劣等ぶりを通じて、学校教育が空転する様を描いているのである。

では、それはなぜ空転してしまうのだろうか。ここでもカギとなるのは宿題である。

前節では、宿題と受験教育の結びつきを確認した。そして夏休み以降、宿題の存在は授業方法にも影響を及ぼしてゆく。夏休みが明けると、「授業のはじめにまず先生は、帖面を机の上にひらかせて、その日の宿題をやって来たかどうかを見てまわり、やって来ない子を立たせる。それからすぐに問題のやり方をしらべにかかり、出来なかつた者はしばらく立たされる」という授業風景が語られる。教室の様子が「前とちがつているような気」を「僕」が覚えているように、受験準備教育が一挙に加速するさまが描かれる。

安岡「のらくろと共に」（『文芸春秋』一九七二・七）によれば、これは青南で実際に体験したものであるらしい。夏休みの宿題に苦しめられた記憶を語りつつ、安岡は「宿題で本当に苦しめられるのは、二学期になってからだ」と書く。あらゆる科目で宿題が毎日課され、それを済ませていなければ立たされる。「学校は勉強を教えてくれるところではなく、宿題を出してそれを調べるところなのだ。勉強はめいめいが自分の家でやってこななければならない」、そう気付いたと安岡は述べている。本作で描かれる授業風景も安岡の語るそれと近似しており、宿題検査機関といつて過言ではない様子が描かれている。

しかし、なぜこうした事態が生じるのか。竹内『立身出世主義「増補版」』（前掲）は、大正期に中学受験の人口が増大した結果、各小学校は「学校格」を意識しはじめたと述べている。進学実績がそのまま小学校の

威信に関わるため、小学校としては受験に全力を注ごうとする。

それは本作に描かれる成績処理の方法にもあらわれている。弘前から転校してきて「何も知らないうちに、一学期がおわった」ところで、「通信簿」には「甲ばかり並んでいた」。ここまで見てきたように、「僕」が優秀な成績を修めたわけではもちろんない。「中学校への内申書のためにそうなっている」のである。

内申書の誕生には、受験勉強の社会問題化を契機とした中学入試選抜方法改定が関わっている。「文部省令第二十六号」（『官報』第二七一号、一九二七・一一・二二）で、中学校令施行規則中の「試験」の語がすべて変更・削除された。小学校教育では「道徳教育及国民教育ノ基礎ヲ授クルト共ニ其ノ身体ノ発達ニ深く留意スヘキ」だが、過度の受験準備教育は「小学校在学中ヨリ只管之カ準備ニ没頭シ知ラス識ラスノ間ニ其ノ心身ノ発達ニ悪影響ヲ及ホ」し、「国民ノ将来ニ対シ洵ニ寒心ニ勝ヘサル」、「国民教育ニ背戾」する。そこで「今回ノ改正ハ中等学校ノ入学者ヲ選抜スルニ従来ノ如キ試験ハ之ヲ行ハサルコトヲ以テ本体」とするとされた（『文部省訓令第十九号』『官報』第二七二号、前掲）。

そのかわりに重視されたのが、「出身小学校ニ於ケル成績等」「人物考查並身体検査」である。各中学校に対する文部省からの通牒「中等学校試験制度改正ニ関スル件」<sup>⑤</sup>では、「中等学校第一学年入学志願ニ就テハ出身小学校長ヲシテ当該児童ノ小学校ニ於ケル凡ソ最終ニ学年ノ学業成績身体ノ状況特性其ノ他必要ナル事項」を「詳細ニ調査シ志願中等学校長ニ直接其ノ意見ヲ報告セシムルコト」と規定された。佐藤『学校教育うらおもて事典』（前掲）は、この「直接報告」の文書が内申書と通称されるようになったとし、「内申書は中等学校入学試験を廃するために、誕生したものなのである」と論じている。

しかし本作でも描かれていたように、内申書は学校の都合に応じて操



作可能である<sup>⑥</sup>。南小でも、進学校としての威信のために各生徒の成績が操作されていた。進学実績を優先する成果主義は内申書をめぐっても描かれているのである。

宿題中心の授業は、この内申書問題と通底する成果主義の産物である。受験に確実はない。合格可能性を高めるならば、できる限り知識を詰め込むしかなくなる。しかし学校での授業時間は限られている。そこで宿題を多量に課し、授業はそれを点検するスタイルになるのである。

それを踏まえて注目すべきは、「僕」の宿題の仕方である。夏休みの宿題をやりはじめた「僕」は、次第に「宿題のやり方が、だんだんわかって来た」、「迷わないで書けるようになった」という。「二十三桁ものものすごいカケ算も、数字だけ書けば一分間で七題でも出来た。応用問題のツルカメ算は、問題を読まないでも、ツル十ぴき、カメニびきと書けば、それでもすんだ。どうせ考えて間違えるぐらいなら同じことだ」。

これは、宿題を「やって来たかどうか」がまず最初の関門となり、その後も宿題の点検を中心に展開する授業の在り方を逆手にとった方法であろう。解答が書いてあるかどうかでまずふるいにかけられるのだから、とりあえずは解答だけ埋めておけばよい。「僕」の編み出した方法はある意味で学校教育の成果主義をよくわきまえたもので、単なる劣等生の所業と一蹴できないイロニーとなっている。

本作の掉尾を飾る場面もまた、「僕」の「宿題のやり方」と通底する。「僕」は「戦争絶対反対」と書かれたピラを前にして次のように考える。

なぜ戦争やっちゃいけないんだ？ そうだ戦争がなきゃだめだ。僕は戦争のはじまった日の学校を思い出した。戦争がもつとあれば、先生は兵隊へ行くと云っていた。みんな行っちゃえ。重ちゃんも金原先生も沢村先生も、みんな行けばいいんだ。南学校なんか燃えち

まえ。(中略)……後からくるのはお巡りさんだ。お巡りさんは僕をみて、感心な子だと云う。名前を帖面につけられて、あくる日僕は校長先生にほめられる。——この生徒は悪いことを書いたピラをはがしたのです。金原先生が歯を出してニコニコする。／足音はもうしない。しかも僕は次のピラをはがしにかりながら、まだ夢をみにつづける。学校の名誉を高めたこの生徒のために、特に夏休み以来の宿題が全部許され、これからは教室ではゆつくりと坐っていてよろしいと云われる夢を。

繰り返しになるが、作中時間は満州事変の年で、それをうけた軍国主義教育が描かれていた。この場面も、「戦争絶対反対」と書かれたピラを剥がす行為を是とする価値観の存在が前提になっている。

まずみておくべきは、「僕」の動機が「感心な子」だと「ほめられる」こと、「夏休み以来の宿題が全部許され」今後教室で立たされなくなることにある点だ。「僕」は自己利益のためにピラを剥がるのであって、決して軍国主義教育の成果ではないものとして描かれている。

「僕」は、ピラを剥がせば警察や担任の金原先生、そして校長先生が褒めてくれるだろうと予期している。剥がした動機が問われる可能性を「僕」はみていない。それは、宿題をやったかどうかの問題とされる成果主義教育の教え通りなのである。ピラを剥がしたことが重要なのであって、その動機は一顧だにされない。自覚的かどうかはさておき、「僕」は学校が成果の一点しかみていないことを知っているのである。

学校教育の目指すところを、ほかならぬ学校教育それ自体が裏切つてゆくということ。中学に入学させ「エリート国民」を養成すること、大日本帝国のために積極的に戦争を遂行する「皇国少年」に仕立て上げるという眼目は、実のところその教育自体によって裏切られている。むしろ

ろそれは、国家よりも私欲に走るような劣等生を育てているのだ。

#### 四、「宿題」の射程

以上のように「宿題」は、一九三一年前後の学校教育におけるイシューをとりこみつつ、特に日本の学校教育の通時的な矛盾を象徴する宿題（＝受験教育）をモチーフに学校批判を呈示している作品である。学校教育が帝国のまやかしに手を貸していることや、自らの掲げる徳目を裏切るような生徒を育てているという逆説が読み取れた。

ところで、本作が発表されたのは一九五二年二月であり、アジア・太平洋戦争後の対日占領下であった。当時は教育基本法制定などによる教育の変化もみられたが、そうした時代に一九三一年の学校教育を描いたことにどのような意味を読めるだろうか。

まず受験に関わって、本作の内容は同時代でも決して色褪せていなかったと考えられる。竹内洋『立志・苦学・出世』（講談社、二〇一五・九）は、受験には戦前／戦後の断絶はみられないとする。制度の変更はあれども、「努力と精神主義」の受験世界、「受験の成功によって得られる立身出世」の「神秘化」は継続していた。こうした「マジな」受験競争からの変容が訪れるのは「昭和四〇年代」であると竹内は述べる。本作では、算術で間違えて立たされた副級長が「机に手をつけて泣きそうな顔になってい」る場面がある。間違えたことが「一生を左右する入学試験」への不安を駆り立てているわけだが、こうした光景は一九五二年時点でも決して現実と乖離してはいなかったと考えられる。

その一方で、「僕」は副級長の姿を前に「何がそんなに悲しいのだろう」と不思議に思っている。それは、「すぐまた坐れるのに、一時間中立たされている僕にくらべたら、ずっと楽じゃないか」という近視眼的な

理由からだ、こうして「マジな」受験競争を対象化する人物を置くことで受験競争に疑問を投げかけつつ、そのための準備教育が学校の眼目を裏切つてゆくことを描いたのが本作であった。

そしてもう一点、一節で触れた本作の文体の問題をとりあげよう。本作には子どもらしさを演出する語りが随所に織り込まれている。徹夜が「大冒険」と換言されたり、徹夜しようと意気込んで布団に入るも次の瞬間に朝日が昇っていたり、いかにもな演出である。他にも、神主の詞を聞いて「へんだな、牛が鳴いてるよ、母さん」と発言して失笑され、張作霖を「宿題のチョーメン」と聞き違えるなど、いつてみれば本作は子どもの日常生活を子どもの視点で子どもらしく語った作品なのである。

この文体は、本作の着想に綴方があることと関連するだろう。安岡「わたしの書き方」（安岡編『現代作家と文章』三省堂、一九六九・一一）に、「宿題」は「小学生時代の綴り方をひきのぼして書いた」とある。その綴方は現存していないが、注目したいのは本作が綴方に着想を得たということである。ここではそれを愚直に受けとってみよう。

綴方は、本稿でも触れた一九〇〇年の小学校令改正にはじまった。大正期には綴方の方法を問う議論が交わされ、芦田恵之助による「随意選題」の理念提唱や、鈴木三重吉の綴方指導がおこなわれた。三重吉は、自身が主幹を務めた『赤い鳥』誌上の読者投稿を選評する過程で綴方への発言をおこない、「見たこと聞いたこと、あつたことを、そのま、書いた作文をよこして下さい」（「選んだあとに」『赤い鳥』一九一八・八）と要請した。「下らない飾りや、こましやくれたたとへなぞが、ごたく／＼使つてある」文章ではなく、「たゞ、あつたことを、ふだんお話しするところの、あたりまへのことばでお話したもの」（「通信」『赤い鳥』一九一八・九）こそ三重吉の求める綴方だった。あるがままを話すように書けという規範は、「宿題」の作中時間である一九三一年前後に隆盛しつつあった生活

綴方運動の基盤をなしていった。

受験現象に同じく、生活綴方運動は形を変えながら戦後に生き延びてきた。山びこ学校である。山形県山本村の中学校教師・無着成恭の指導を受けた江口江一の「母の死とその後」が『世界』の一九五一年二月に掲載され、翌月に『山びこ学校——山形県山本村中学校の生活記録』が青銅社より出版された。刊行直後から話題となった同書は、以後戦後民主主義教育の模範のように扱われることになる。

では、生活綴方と山びこ学校をつなぐもの、すなわち戦前・戦後における綴方——作文の連続性は何によって担保されるのか。川村湊『作文のなかの日本帝国』（岩波書店、二〇〇〇・二）は、「戦前の生活綴り方運動も、戦後のその再生も、社会主義・共産主義イデオロギーの支配下にあった。それは戦中の一時期、軍国主義や皇国主義に衣替えをしたのだが、子供達の内面を支配する、巧妙なイデオロギー装置として働いたこととは紛れもなかった」と指摘している。「書くこと」による「内面」の支配——教室に近づけていえば、「教師は生徒たちの綴り方＝作文の検閲官にいつでもなりうるということ」。芦田の「随意選題」、それに続く『赤い鳥』や生活綴方運動、そして山びこ学校においてさえも、書くべき内容は常に教員によって検閲されていたのである。

「宿題」には、わずかながら綴方に触れた箇所がある。夏休み明け、担任の金原先生は「お前たちの一生を左右する入学試験のすむまでは、もう休みはない」と言い放つ。これは「南学校全体の合い言葉」で、式典や朝礼その他で必ず出てくる言葉だとされる。そして、「綴方の最後はどんな題でも」「いよいよ僕らの一生を左右する試験が……」と、みんなが「書くのだ」とある。仮に南小において「見たこと聞いたこと、あつたことを、そのまゝ」という理念が共有されていなかったとしても、「どんな題でも」「みんなが」同じく受験の重要性を書きつけるのは不自然だろ

う。先の副級長のような生徒は書くかもしれないが、七〇人以上いるクラスで全員が同じことを書く事態には、教員による検閲の存在を疑わざるを得ない。そう書かせることで受験に注力させるといふ、生活指導的な役割を綴方に担わせているとも考えられる。

本作は子どもの経験世界を子どもの視点と語り口で描いていた。先の安岡の発言と併せて、本作を綴方の文脈で解釈することは無理筋ではないだろう。そう考えたとき本作は、みてきたような綴方——作文教育の理念に反するものではないといえる。しかし、検閲官たる教員の評価するものとも決してなり得ていない。授業についてゆけず宿題をおざなりに済ませ、学校のかわりに墓地へ行き、嫌いな人々が戦争へ行くことを願うがゆえに、そして褒められたいがために「戦争反対」と書かれたピラをはがす少年——本作は劣等生の綴方なのである。

しかし、これが「僕」の経験した日常であり、「見たこと聞いたこと、あつたことを、そのまゝ書いた」ものであるとしたらどうか。綴方の理念に則って書いた文章が否定される矛盾。綴方にしろ作文にしろ、子どもの経験世界を書くことを促しながらも、それをそのまま書いたのでは決して受け入れられないという隠された検閲の存在は、本作からも指摘できるであろう。

そしてこの検閲もまた、学校が用意した徳目から子どもたちが逸脱することを促すものである。「見たこと聞いたこと、あつたことを、そのまゝ書いた」としても叱られるのだから、ウソを書くしかない。少なくとも一九三一年時点での学校教育が孕んでいた矛盾は、ドラスティックに変容したはずの戦後民主主義教育のなかにも胚胎していたことが示唆されているのだ。本作を同時代の文脈に再布置したときに読み取れる批評性はそこに賭けられている。「嘘つき」も劣等生も、学校教育がつくるのだ。

## 注

- ① 特に軍隊小説『遁走』（講談社、一九五七・一二）については、村上兵衛「解説」（『遁走』講談社、一九五八・一〇）が、自身を含む『戦中派』の徴兵経験を仔細に描いたとしていちはやく評価した。
- ② 石坂幹将「『悪い仲間』の世界」（瀬沼茂樹古稀記念論文集刊行会編『現代作家・作品論』河出書房新社、一九七四・一〇）や、金岡直子「安岡章太郎論」（神戸大学大学院文化科学研究科文化構造専攻博士課程論文、二〇〇八・三）などが例に挙げられる。
- ③ 以上は安岡『僕の昭和史Ⅰ』（講談社、一九八四・七）に拠った。
- ④ 串間努『ザ・ガム大事典』扶桑社、一九九八・九
- ⑤ 上田万年『国語のため』富山房、一九九五・六。なお、引用はその二年後に出版された訂正再版（一九九七・一二）に拠った。
- ⑥ 作中時間の一九三二年に使用された第三期国定国語教科書は、『尋常小学国語読本』と『尋常小学読本』の二種類である。もともと、「東京府でも、新編集の読本が完成した大正一三年四月入学の一年生から『尋常小学国語読本』に変更」（国立国語研究所編『国定読本用語総覧4』三省堂、一九八九・九）したとあり、一九二七年入学の安岡もそれを使用したであろう。なお、その編纂趣意書には「標準語」について特に記載がないが、これは「標準語という名称と概念は、すでに定着していた」（同前）からだと指摘がある。
- ⑦ 松村明『江戸ことば・東京ことば辞典』（講談社、一九九三・七）によれば、江戸言葉では「万歳」を「まんぜえ」と読むように、連母音「アイ」(ae)が「エー」(e)に変化する。そして「この発音上の特徴は、東京の下町ことばにもほぼ受けつがれてきているものである」とある。
- ⑧ 松村明『増補 江戸語東京語の研究』（東京堂出版、一九九八・九）は、連母音「アエ」(ae)が「ハー」(e)に変化するの江戸語の特徴である
- とし、下町言葉にはそれがみられるものの、山の手言葉では連母音のまま発音されているとしている。
- ⑨ 一九二二年に設置、現在は「都民の日」と改称されている。
- ⑩ 『官報』第七二一五号、一九〇七・三・二一
- ⑪ 竹内洋『立身出世主義「増補版」』世界思想社、二〇〇五・三
- ⑫ 沢山美果子「教育家族の成立」『教育』——誕生と終焉』藤原書店、一九九〇・六
- ⑬ 安岡「夏なお寒き話」（『驢馬の学校』現代史出版会、一九七五・一一）で、小学校時代の修身科で教育勅語を暗唱させられたり、教員による解説を「耳にタコができるほど聞かされた」りしたとある。
- ⑭ 「中学入学の予習は重大な社会問題」（『読売新聞 朝刊』一九二四・四・二九）、「そらまた始まった入学準備の居残り学習」（『読売新聞 朝刊』一九二四・一・一二）といった記事も出ていた。
- ⑮ 引用は岡田怡川「新入学選抜法の経過及実際とその批評」（『教育時論』一九二七・四・五）に示されたものを参照した。
- ⑯ 同時代でも早くから批判があった。一例として、教育評論家・岡田怡川「新入学選抜法の経過及実際とその批評」（『教育時論』一九二七・四・一五）は、「小学校長の内申には個人的には割り増しがあり、学校相互の間には客観的標準がない」「中等学校側は小学校長の内申に対しては決して信頼を置いてゐないことは明白の事実」としている。
- 附記 「宿題」からの引用は『安岡章太郎集Ⅰ』（岩波書店、一九八六・六）に拠り、その他文献はすべて記載した書誌に拠った。引用に際してルビ・傍点・文献副題は適宜省略した。引用中の／は改行を示す。
- （本学大学院博士後期課程）